

5年間の選択性緘默から回復した男児のあゆみ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/1326

5年間の選択性緘默から回復した男児のあゆみ

木 場 清 子

(金沢大学医学部神経精神医学教室)

1 はじめに

子どもの神経症的行動障害のひとつである選択性緘默(elective mutism)は、話すことや言語理解において正常な能力を有するにもかかわらず、限られた状況を除き、まったく言葉を発しない状態が数年間持続するものである。この診断概念は学校で喋らない7歳男児の症例を報告した Tramer,M.(1934) によって確立され、心因性無言症や場面緘默および Kanner,L.(1957) の任意性沈黙とも同じ概念である。近年、精神障害の診断に広く用いられている DSM-III (1980) では、選択性緘默の基準として、A) 学校を含むほとんど全ての社会的場面において喋ることを持続的に拒否する、B) 話された言葉を理解し、話す能力の存在、C) 他の精神障害もしくは身体疾患に起因しない、という3項目を挙げている。

このような子ども達のほとんどは自宅では普通に話しているため、他の問題がない限り、学校や幼稚園で喋らないことを指摘されても、両親はそのうちに治るだろうと放置している場合が多い。しかし、同年齢の子ども達と言語的交流がないということは、その期間が長ければ長いほど社会的発達が限られ、学校でまったく発言しないために学業成績を低く評価されやすいといった問題も生じてくる。

ここに報告する例は、保育所時代から小学3年生の夏休みまでの5年間(筆者らが担当するまで)、家の外では一言も喋らなかった男児である。この子と接した1年2ヶ月を通して選択性緘默および児童の神経症の治療について考えてみたい。

2 症 例

S君：初診時8歳6ヶ月(小学3年)、男。

主訴：家で普通に喋るが、外では喋らない。

家族構成：父39歳、母38歳でともに自宅から少し離れた場所で内装業を営んでいる。姉15歳(中3)、長兄13歳(中1)、次兄11歳(小6)の4人兄弟の末っ子である。本児が小学校に入るまで父方祖母(69歳)が同居していた。

生育歴：胎生期・出生時には異常なく、生下時体重は約3000gで標準であった。乳児期は母乳で育ち、発育は良好。起立13ヶ月、歩行18ヶ月でやや遅い他、身体的・精神的発達に問題は認められていない。

2歳1ヶ月で、大小便の自立ができていたことと母が勤め出したため、保育所へ入所した。人見知りが強く、友達がほとんどできなかった。また、保育所から帰ると家の中で一人で遊んでおり、祖母は「手のかからない子で話しかけたり遊び相手をすることはあまりなかった」という。

保育所入所後間もなく、保母から「喋らない」ことを指摘されたが、両親は気にとめなかった。父母とも子どもの頃は無口で、特に母は学校では聞かれたことしか話さなかつたという。5歳から1年間幼稚園へ通ったが、ここでも「話さない」と言われ、状態は保育所時代とほとんど変わらなかつた。小学校入学後も同様で、何を聞かれても答えず、休み時間は一人でぼつんとしていることが多かつた。しかし家ではよく喋り、年の近い次兄とともにあいの喧嘩をするなど元気に過ごしていた。3年生になっても学校場面での緘默は変わらず、友達との交流がほとんどないため、担任の勧めで夏休みに金沢大学医学部附属病院神経科精神科を受診した。

性格は母によれば内気、甘えん坊、よく気がつく、負けず嫌いで内弁慶タイプである。成績は中位で、美術の時間が好き(話さなくてもよいからか?)だという。

3 治 療 過 程

初診時の状態：神経学的検査では異常なし。問診に対して言語的応答はないが頷いたり、本を見せて問い合わせると指をさして応じた。選択性緘默の診断で、児童外来へ通院するように言われた。

児童外来初回：男性医師の質問に自分の名前と学年を答えたが、その後は言葉が出ない。答えようとするジェスチュアがあり、顎から首、肩にかけてしゃくり上げるようになる。言語での交流がまったくできない状態ではない。患児の緊張を弱めるため Baum test を実施した。かなり時間をかけて多くの枝と葉を丁寧に描き、沢山の

実をつけた（図1）。小学3年生の Baum としては非常にしっかりした作品であり、用紙全体に大きくかつ細かいところまで観察して描いてある。残り時間は S 君と母と医師と3人でゲームをして終わった。その時、次回からは2週間に1回来院すること、S君は筆者と箱庭療法や遊戯療法を、母親（または父親）には並行して男性医師が治療的面接を行うことを約束した。すなわち、患児は緘默ではあるが Baum に見られるように内的な豊かさを持ち、非言語的手段で自分を表現し交流ができるという理由で、また母親（父親）には選択性緘默の理解および治療への協力を目的とした。

来院日は母が担任への連絡帳に早退させてほしい旨を記入し（S君は自分で申し出られない）、担任がS君に許可すると言う方法を探った。

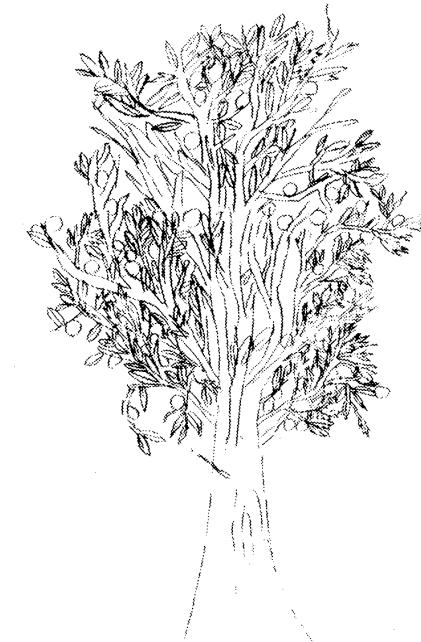


図1 初回のバウム・テスト

治療経過：1年2カ月間に23回の面接を持ち、S君は21個の箱庭を作った。以下に、S君の箱庭療法と遊戯療法を中心に、母親（父親）面接での情報も並行して要点を述べる。

第一期 出会いと遊びの序章（1～5回）

1回目（8月24日） 箱庭1（図2）

S君と治療者（筆者）が初めて会う。一般的な質問には（生年月日、学校名、担任の名、家族構成、兄弟の年齢など）、小声であるがはっきり答える。やや元気がなくおとなしい男の子という印象である。

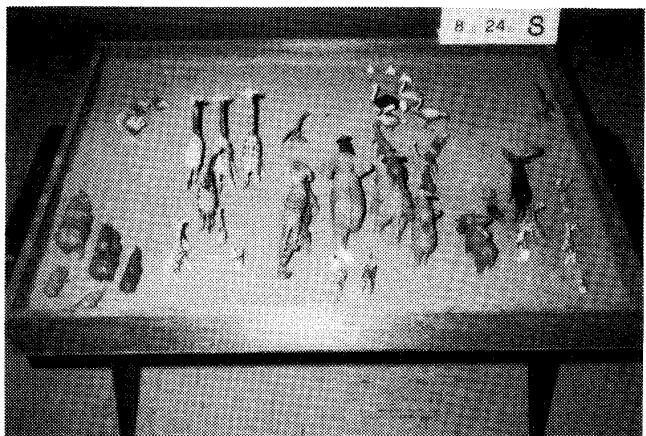


図2-1 箱庭1（正面）

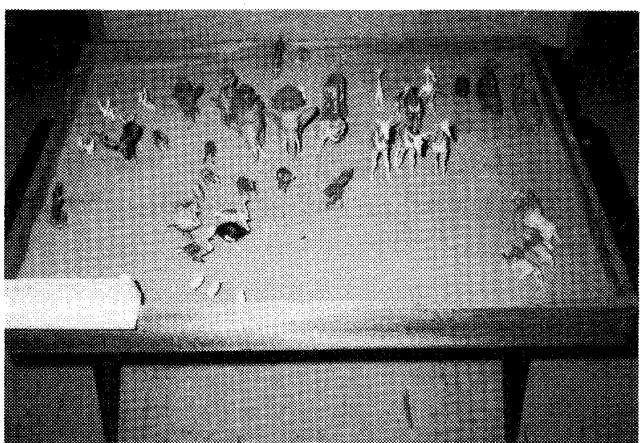


図2-1 箱庭1（反対側からみる）

箱庭の説明に「はい」と答え、スムースに作り始めたが、棚の中の動物に手が触れて倒れると気にし、きちんと直してから次の動作に移る。「後で、全部終わったら直してあげる」と言うと安心した様子である。左下を少し掘ってキリン2頭と虎1頭を立たせたが、全部取り去り、棚の元の場所に戻した。新たに大きな虎を手前中央に向こう向きに置いた。手の中に同じ種類の動物をいくつも持って、ひとつずつ丁寧に並べていく。大きな虎の背中に小さな虎、大きな象の背中に小さな象を乗せるのにかなり苦労している。その後、トナカイ、ライオン、サイ、ワシ、ダチョウ、カンガルー、サギの順に置く。黙って治療者の方を見ているので、「できたの？」と聞くと頷く。「何ができたの？」「………」（無言）30分近くを要した力作で、全体的には「箱の中が一杯になっている」という印象である。多くの動物は向こうを向いているが、最終的には円形に向かい合って集会をしているのか、対立しているのか、どちらとも考えられる場面である。

〔母親面接〕

Sは小さい時から人前へ出ることが嫌いで、保育所や

学校で喋らなくても、いずれ治ると思っていた。以前から動作がのろく、やや赤ちゃんっぽい子である。家では兄弟の中で一番よく親の手伝いをするし、細かいことに気がつく方なので、家族から可愛いがられている。

(母親の印象：確かに口数の少ない人であるが、これといって目だった偏りは感じられない。S君のことについても心配している様子はない。学校で言わされたから相談に来たというふうである。なお、母親面接に際してはS君の日常生活や家族とのかかわり方および母親の感じていることを自由に話してもらい、面接者が必要に応じてアドバイスをするという方法を採った。)

2回目（9月7日） 箱庭2（図3）

S君は入室した入り口の近くでそのまま立っている。何をしてよいのか戸惑っている様子なので、「今日もこれ作ってみる？」と話しかけるが、黙って治療者の顔を見ている。「いや？」と問うと首を横に振る。「作るの？」「はい」と今度ははっきり答えた。

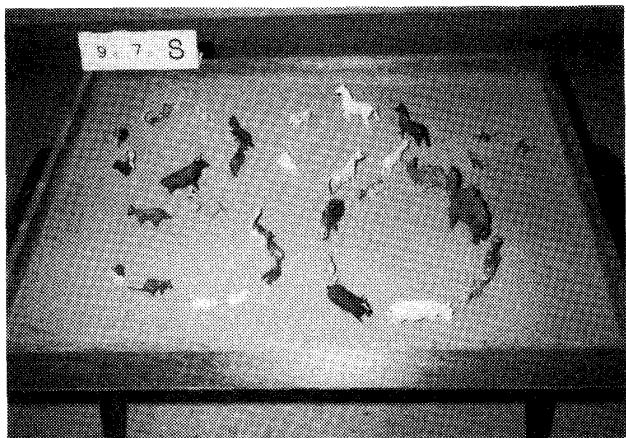


図3 箱庭2

棚の前で約5分間しゃがみ込んで思案していたが、右下にラクダの大小7頭と牛、馬を丸く並べて輪を作り、次に左下にラクダ、カンガルー、羊で輪を作った。同じように右上に馬ばかりでやや小さな輪、左上にラクダ、馬、野牛、トナカイで輪を作った。最後に右上に猿を3匹並べて、「できた」と言った（自発的な第一声！）。

「何？」「メリーゴーランド」「動物のメリーゴーランド？」「うん」と。学校で給食を食べてから来院したことが治療者の質問に答える形で分かったので、「午後は何限あるの？」と聞くと、「分からん」と怒ったように答えた。S君は、午後の授業を早退して病院へ来てることを知っていてそくなことを尋ねる治療者に腹を立てたのかもしれない。隣のプレイルームで他の男児が遊んでいるのを気にしている様子なので、「向こうへ行って遊ぶ？」と聞くと、「うん」と言う。治療者と二人で

“沈没ゲーム”をする。同じ部屋に同年齢の男児が活発に遊び回っているのを気に留める様子もなく、一生懸命ゲームに没頭していた。

〔母親面接〕

Sは病院へ来るのを楽しみにしている。母が「何をするの？」と問うと、「遊ぶんや」と言う。宿題はきちんとやっていくが、よく忘れ物をする。それを先生にも友達にも言わない。同級生に乱暴な子が多いので、内気なSはそれが怖いのかもしれない。朝、母が促さないといつまでもつっ立っていて、歯も磨かない。（「細かく指示しないで、S君が自分でやるまで待っていて下さい」と伝える）

3回目（9月21日） 箱庭3（図4）

前2回よりやや元気がない。「作っても作らなくてもいいよ」と言っても、黙って立っている。20分近くもそうしているので、「隣の部屋へ行って遊ぶ？」と話かけても答えない。仕方なく治療者が玩具棚を整理し始めると、S君も何か玩具を目で探している様子。やがて、木を2本置いてその上に猿をあっちこっちに乗せた（合計10匹）。木の周りに象、キリン、馬の動物達を並べた。題は「猿が木に登っているのを見に来た」と言う。

今日は最初から元気がなかったのは、母が勤め先の店から帰ってくるのが遅れて、S君が30分も家で待っていたためらしい。

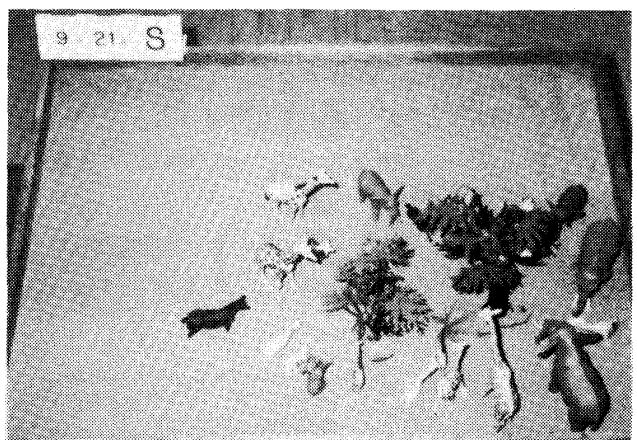


図4 箱庭3

〔母親面接〕

Sは学校へ行くのは嫌がらないが、学校のことは話さない。治療には父親も同意し、賛成している。

4回目（10月5日） 箱庭4（図5）

棚の前で動物を手に取ったり戻したりして7分くらい迷い、9分で作りあげた。「できた！」と大声で言う。「何をしているところ？」「喧嘩しているのを止めに来た」「どれとどれが喧嘩しているの？」「これとこれと

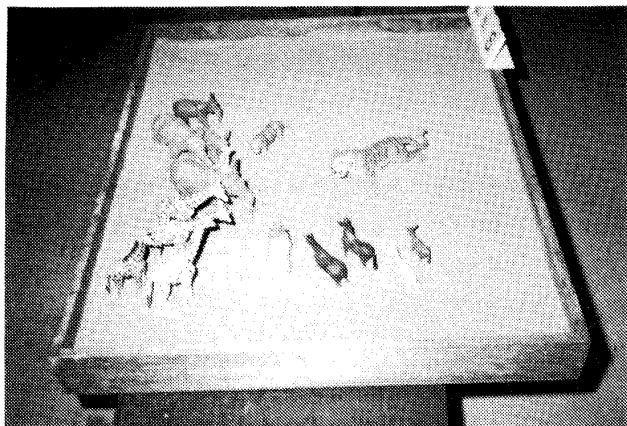


図5 箱庭4（横からみたところ）

これ」「3つで喧嘩しているの？」「うん」虎2頭とライオン1頭の対決を、象と馬とキリンが大勢で見守っている。その後、プレイルームでボーリング。黒板に表を書いて得点を記入させると、治療者が0点の時、書き込みながらすごく嬉しそうな表情をする。19対12でS君の勝ち。にこにこしながら、「さいなら！」と帰って行った。今日は全体に言語的応答がはっきりしていて、元気であった。

[母親面接]

Sは朝早く（6時前）起きるが、マンガを描いて遊んだりしている。相変わらず忘れ物が多い。長女はしっかりしていて、あまり弟達にはかまわない。長男は行動が速く、おっちょこちょいであるが、Sを可愛いがっている。次男は小児喘息で病気がちであったためか慎重で神経質であり、Sとよく喧嘩をする。Sも負けていない。

5回目（11月2日） 箱庭5（図6）

手にいっぱいの動物を抱えて、種類別に並べ、さらにそれぞれの種類のところへ追加していく。右下の木には猿が4匹乗っている。前2回で見られた空間が消え、箱全体が多くの動物で占められた。「できた」「なに？」「動物園」と言う。

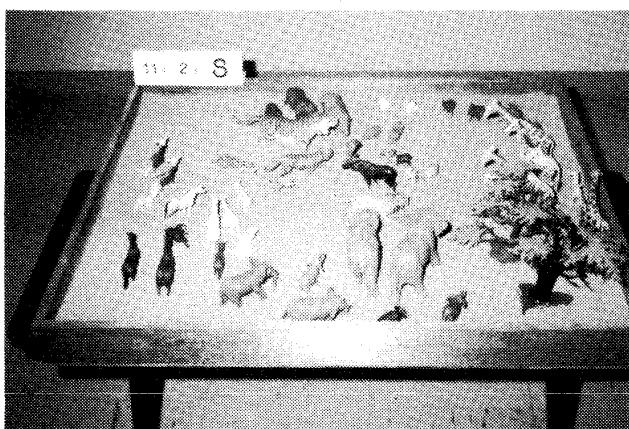


図6 箱庭5

[母親面接]

Sは「1カ月ほど前から学校で明るくなった」と担任から言われた。先生の質問に対して手を挙げるようになつた。家では変わらず。午後2時頃学校から帰るが、家中で一人で猫と遊んでいる。2週間前の来院日に従業員が休んだので病院へ行けないと言った時、Sは残念そうにしていた。

（第Ⅰ期のまとめ：S君は2回目にして自発的に言葉を発した。箱庭にもプレイにもスムースに入り、治療者との関係もごく自然にでき上がっていった。）

第Ⅱ期 自己主張と緘默の軽減（6～9回）

6回目（11月16日） 箱庭6（図7）

今日は迷わず、すぐ指で大きな円を描いて右側に馬を7頭、逆時計回りの方向に向けて置いた。そして「できた！」と。「なに？」「競馬」所要時間が10分と速かったので、プレイルームでトランプをして遊ぶ。

徐々に言語的反応が多くなり、「うん」のみでなく短い文章で返ってくるようになった。

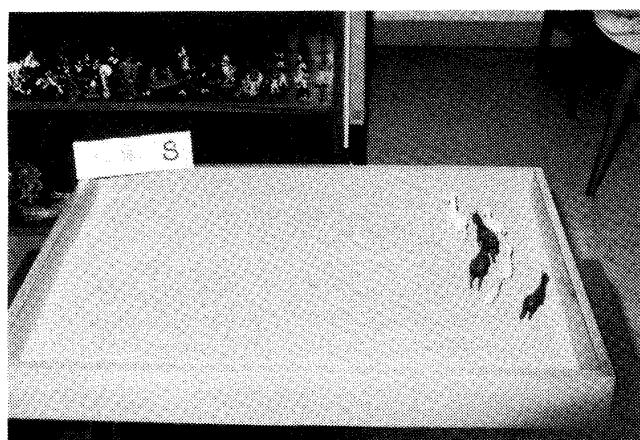


図7 箱庭6

[母親面接]

今年から母がキリスト教関係の集会に出ていて、先日、Sが一緒に来て同年齢の男の子に「バイバイ！」と大きな声で答えていた。少しづつ積極性が出てきた。

7回目（12月7日） 箱庭7（図8）

中央の手前に大きなワニを向こう向きに置き、それに相対するように小さなワニを4匹。右側にサギ、左側にダチョウの群れを置いた。「できた！」「なに？」「池の中」（砂には一度も触れていない）ワニの集団を挟んで両側に鳥の集団という場面である。治療者が何故か気になり、「ワニと鳥が同じ池の中にいるの？」と問う。「うん」「大丈夫かな？」「……」「別に考えなかつた？」「うん」（治療者が先走ってしまった！）その後、

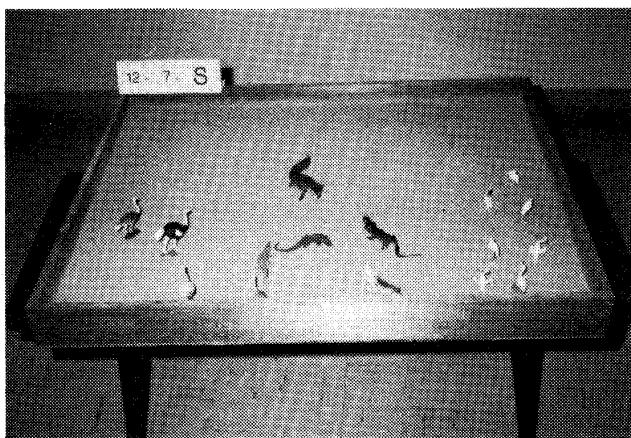


図8 箱庭7

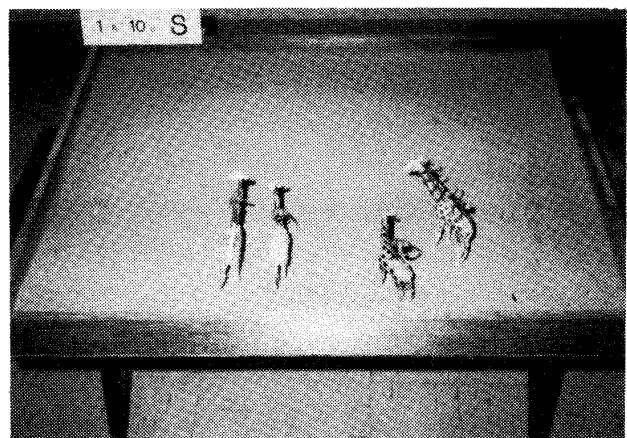


図9 箱庭8

ボーリングをし、29対23でS君の勝ち。ボールの投げ方は的確で力強い。(1週間前に来院するはずだったが、連絡がないので家へ電話をするとS君がでた。応答は年齢相応で、特に言語的な不自然さもなかった)

[母親面接]

Sは少ししっかりしてきた。忘れ物も減った。先週、病院へ行けないと言った時、「しょうがない」と言っていた。今朝、「病院へ行く日だから忘れないように」と言うと、「そんなこと忘れる訳がないがね」と答えた。他の兄弟に比べて欲しいものを我慢するし、よく気がつくので、親にとっては良い子である。

8回目(12月21日)

父と来院。「今日はしない(箱庭)、ゲームをする」とはっきり言葉で意思表示をした。「お母さん、姉ちゃんの学校へ行った」と。父については「家で、お父さんが将棋が一番強い」と言う。ゲーム2回とボーリング6回をして、いずれも治療者が勝った。S君は少し悔しそうな顔をしていた。

[父親面接]

Sは元来、外ではおとなしい子である。「外では猫、家では虎」と。父親自身は短気で、几帳面ではない。Sと一緒に風呂に入ったり、日曜日に釣りに連れて行ったりしている。母親は生真面目で、おとなしく、少し融通がきかない面もある。S自身「少し良くなってきた」と話している。父から見ても良くなったように思う。具体的にどこがどうとは言えないが……。

9回目(1月10日) 箱庭8(図9)

キリンを4頭置き、その背中に猿を逆さまにしがみつかせて、「すべり台」と言う。キリンの形をしたすべり台に猿がこちらを向いて滑って遊んでいる。約10分で終了。箱庭を作るのが徐々に速くなってきた。

[母親面接]

担任の話では、「授業中、急に当てる喋らないが、予告して指名すると答えるようになった」と。ただし、友達とはまだ話せない。兄弟と一緒にすると、その友達と集団で話はできるが、1対1では話せない。

(第Ⅱ期のまとめ:自分の思うことを言語化でき、治療者とのやりとりも年齢相応なものになってきた。家の外でも少しずつ話す姿がみられている。)

第Ⅲ期 現実場面の変化と母の変化(10~13回)

10回目(1月24日) 箱庭9(図10)

1時間半の遅刻。尋ねると、「忘れた」「誰が忘れたの?」「僕」と。(通院当初は病院へ来ることを喜び、7回目頃には「そんなこと忘れる訳がないがね」と言っていたS君が来院日を忘れたという変化は、もうわれわれの援助が無くとも大丈夫らしいと感じ、治療者はいつ終結すべきか考える時期に来たと思った。)最近は表情も生き生きしていて、第一印象のひ弱さが消えている。

大きな象2頭と虎1頭をくっつけて並べ、その上に小さな象を乗せ、さらに苦労しながら座った馬を乗せて、「ピラミッド」と言う。

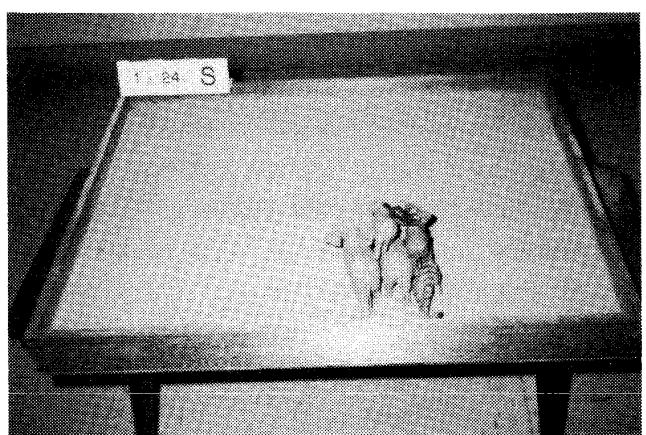


図10 箱庭9

プレイルームでは紙芝居を選び、治療者と交代で1つずつ読む。S君は「オニタの買い物」を読んだ。会話の部分はしっかりイントネーションをつけて、3年生としては上手な読み方である。

[母親面接]

Sが母と一緒に集会に参加して、子どもにも大人に対しても、すこし間をおいてからではあるが、話ができるようになった。「赤ちゃんが成長していくように少しずつ変わっていく。それを見ていて嬉しい。人並みに話せるようになって欲しい」(担任から受診を勧められた頃は、「いずれ治るだろう」と気にしなかった母親にも変化が起きている)。

11回目(2月7日) 箱庭10(図11)

20分以上も棚の前で考えあぐんでいる様子なので、「無理に作らなくてもいいよ」と言ってみたが、知らん顔をしていた。そのうち、向こう向きに馬を7頭、その後にライオンを3頭置いて、「できた」「なに?」「ライオンが馬を追いかけているところ」終了後、野球ゲームをして7対2でS君の勝ち。

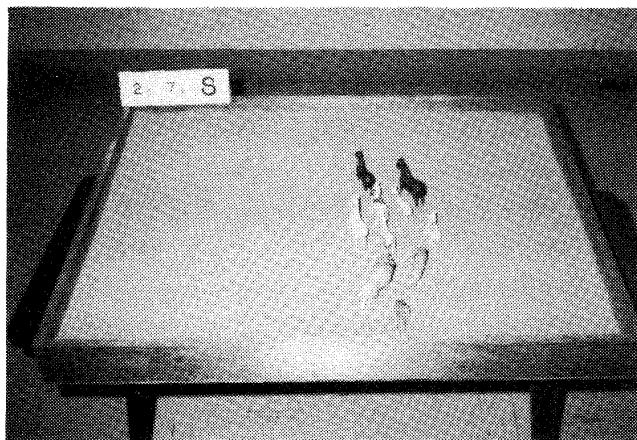


図11 箱庭10

[母親面接]

学校で笑顔が見られるようになった。家で小さい頃から兄達に命令されて動いていたせいか、未だに自分の考えで何かをするということが身についていないようだ。学校で自分の考えを書けと言われると書けない。

12回目(2月22日) 箱庭11(図12)

追加購入した新しい箱を選んで、その中にカンガルーを6頭、虎を2頭、右から左へ走っているように置く。「終わった」「なに?」「カンガルーと虎がジャンプしてどこまで跳べるか競争しているところ」

前々回、そろそろ治療の終結を考える時期に来たと感じたこともあり、Baum testを実施した(図13)。初回

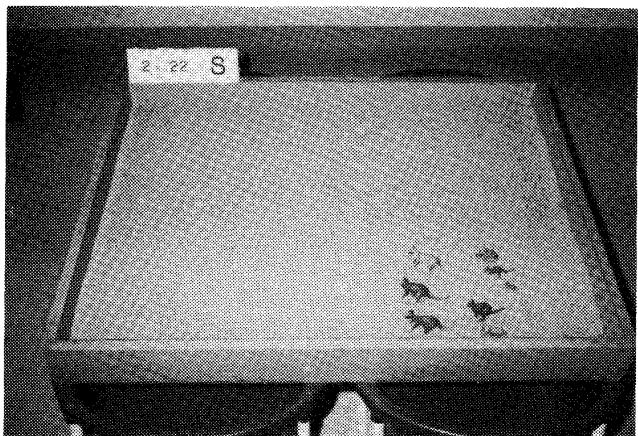


図12 箱庭11

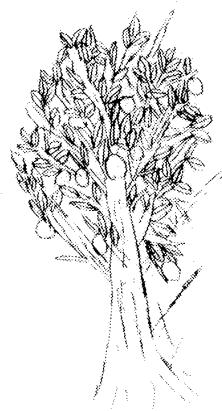


図13 来院12回目のbaum・テスト

の作品に比べて Baum が小さくなり、中央より左側へ傾き、空間が広くなってしまった印象が強い。S君のエネルギーは自己の内的世界に向かっていて、現実生活に対する関心は治療開始時より狭くなっていると思えたので、終結は当分見合わせることにした。

[母親面接]

(「S君はなぜ喋らなくなったと思いますか」という面接者の問い合わせに、母は次のような話をしてくれた)「保育所でSが大便をもらしたことがあった。そのパンツは押し入れに隠してあったので、私は知らなかったが、数日して保育所へ行った時、同じ組の女の子達が私のところへ集まって来て、『Sちゃん、ウンコもらしたのよ』とあの子の前で言った。そのことがSにとってひどく恥か

しかったに違いないと思います」。汚れたパンツを母親にも見つからないように隠していたのに、大勢の前で告げ口されたことは、元来内気なS君にとって大きな精神的外傷として残ったであろうことは想像に難くない。選択性緘默の原因やきっかけは不明なことも多いが、S君の場合はこの事件をきっかけとして、ますます社会的状況での緘默を強めていったものと考えられる。

(面接を始めた頃に同じ質問をした際に、「もともと外では無口な子ですから」とか、「思い当たることはなっています」と言っていた母親が11回の面接を経てS君の緘默の原因を考え、面接者との信頼関係も確立できていたから、答えることができたのだとわれわれは考えた。治療意欲という点では、子どもの学級担任に勧められて受診したものであり、最初は「いずれ治るだろう」という消極的な態度であった。初期の面接では答えが得られなかつたのも当然だったのかもしれない。)

13回目（3月7日） 箱庭12（図14）

カンガルーを先頭に猿、亀の順で数匹ずつ左方向に向けて置いた。「競走しているところ」並べた順序はそれぞれの能力を考えてある。ゲームにオセロをしたが、治療者が大勝してしまったため、S君はやや機嫌斜め。

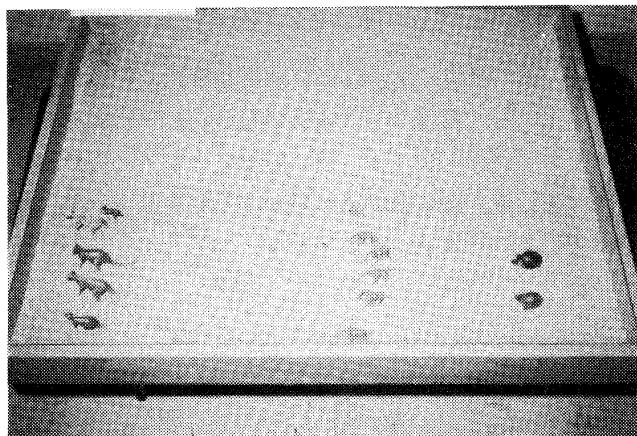


図14 箱庭12

[母親面接]

今日来院の途中、バスの中でSが吐いた。以前からよく乗り物に酔う。最近になって、兄と一緒にではなく、一人で登校するようになった。

（第Ⅲ期のまとめ：S君は来院を忘れるほど現実の生活に興味をもつようになり、話す対象も広がりを示している。母親もS君について真剣に考え始め、治療に対して積極的になってきた時期であった。）

第Ⅳ期 作品の変化と実生活の変化（14～20回）

14回目（3月28日） 箱庭13（図15）

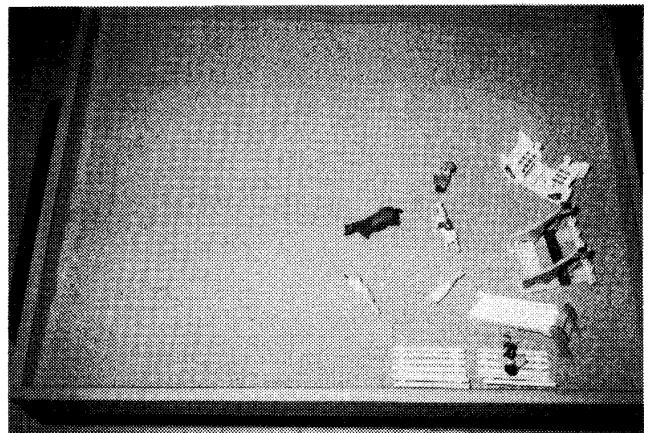


図15 箱庭13

約15分ほど考えた後、キリンを形どったブランコ、ベンチ、白鳥型のシーソー、すべり台を置き、4頭の馬を輪にして並べた。しばらく考えている様子だったが、ベンチに女人を座らせ、男の人を一人立たせた。

「終わりました」「なに？」「動物の公園」初めて人間が登場した。立っている男性は「道を通って来た人」と言う。女性については説明なし。治療者は女性は誰かを待っているのではないかと考え、いわゆる“お待ちのテーマ”が表れたと受け取った。

[母親面接]

春休みに入ってから友達の家へ遊びに行くようになった。今までになかったことである。学校でも皆と遊べるようになり、積極性が出てきたと言われた。母がそれを褒めるとSは非常に喜んでいた。

15回目（4月25日）

S君来院せず（通院に慣れてきたので、別々に病院へ来て母と待ち合わせていたが、S君は忘れたらしい）

[母親面接]

新学期になって担任が変わった。「前の先生から聞いていなかったので、S君が喋らないということに気がつかなかった。返事もしているし、他の子と変わらない」と言われた。最近、友達と夕方遅くまで遊んでいる。

16回目（5月9日） 箱庭14（図16）

15分くらいで完成。「ぼくの家の近所」と言う。塀に囲まれた家を中心とし、両側に2軒ずつ家があり、道路には歩いている女人とバイクに乗った男の人がいる。柵の外に男の人が一人働いている。上方に空間がかなりあるが、これまでの作品と違って現実的・社会的なものになってきた。

日常生活でも以前に比べて活発で社会性も出てきているので、3回目のBaumを実施した（図17）。中央に大きな木と、その左後方にやや離れて小さい木を立体的に

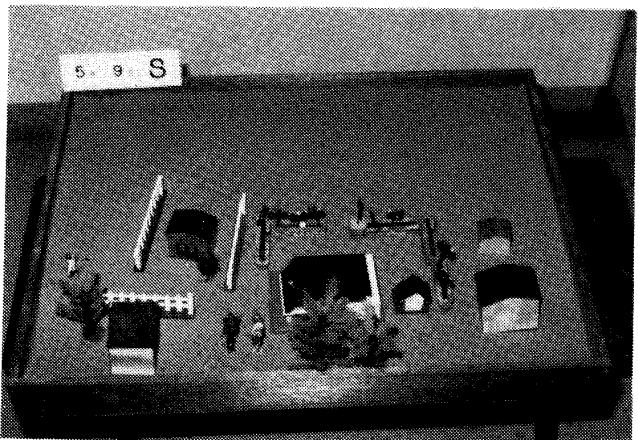


図16 箱庭14



図17 来院16回目のbaum・テスト

描いた。前2回に見られたようなぎっしり詰まった葉や実——緘默児の Baum の特徴とされている——がなくなり、2本とも幹や枝が力強く描かれ、全体にスケッチふうにまとめたという感じである。大きい木の根元近くから新芽が出ていることが注目される。

ここで、治療者が「S君はずいぶん良くなったみたいね。もう病院へ来なくても大丈夫だと思うけど、来なければ来てもいいし、どうする？」と尋ねたところ、「まだ、来る」と言う。

(この問いかけは唐突だったかもしれないが、これまでの箱庭の流れや Baum の変化、および生活領域の広がりは、われわれに治療の終結を考えるに十分な材料を呈示していると判断できたのである。)

〔父親面接〕

Sは母が都合悪ければ「自分一人でも病院へ行く」と言っていた。最近はよく友達のところへ遊びに行っている。家では変わったことはない。

17回目（5月23日） 箱庭15（図18）

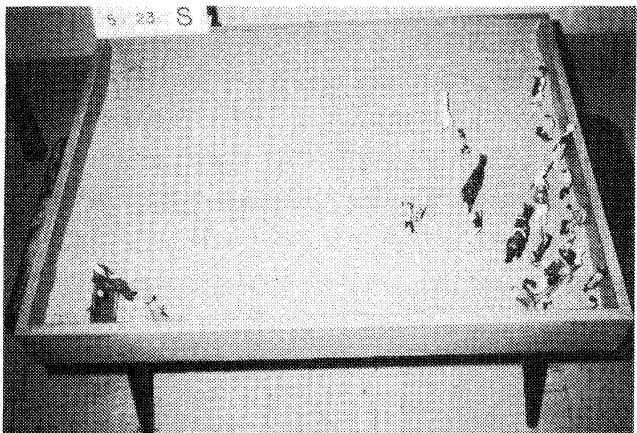


図18 箱庭15

指で砂の上に円を描き、それに沿って馬を4頭置く。円の外側に立っている人やベンチに腰掛けている男女・子ども合わせて19人。「競馬と見物している人」と言う。馬と馬の間にいるのは「おっこちた人」と。

〔母親面接〕

学校では、当番で言わなくてはならないことはきちんと言っている。友達が「野球をやろう」と誘いに来る。これまで前の日にすませていた宿題を、朝になって慌ててやっている。（「それが子ども本来の姿なのだから、安心して見ていて欲しい」と伝える）

18回目（6月13日） 箱庭16（図19）

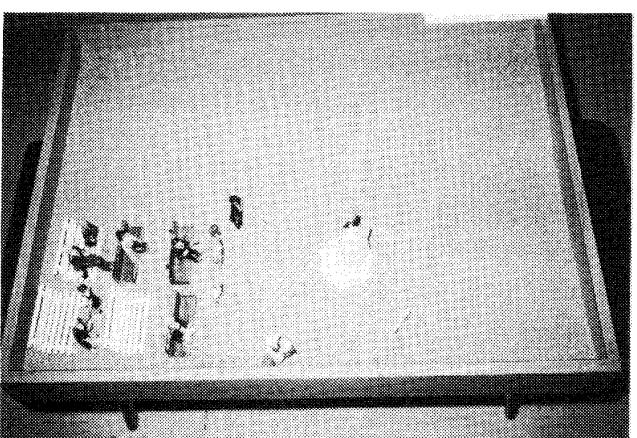


図19 箱庭16

左下にベンチを置いて人を数人座らせ、離れた所に十字架を立てた。その真ん中に花嫁・花婿のセットを立てて、「できました」「なに？」「結婚式」

〔母親面接〕

友達の家で遅くまで遊んでいる。ここ2~3ヶ月、全般によくなったように思う。

19回目（7月19日） 箱庭17（図20）

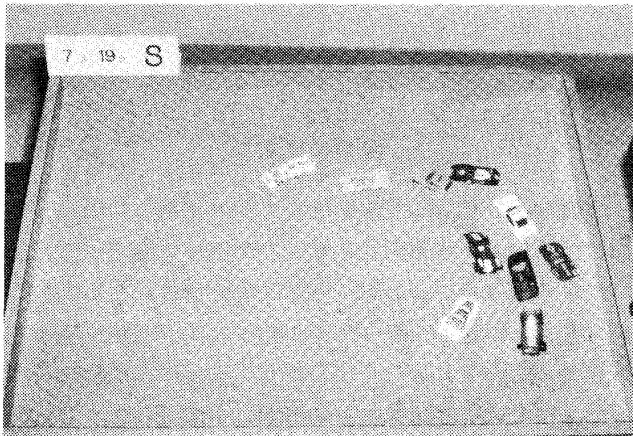


図20 箱庭17

砂の上に3重の円を描いて、右下から右上に向けて競走自動車を10台、次々と置いた。「カーレース」

〔母親面接〕

忘れ物など、自ら担任に申し出るようになった。感想文や自分の意見を書く問題も答えられるようになった。

20回目（8月1日） 箱庭18（図21）

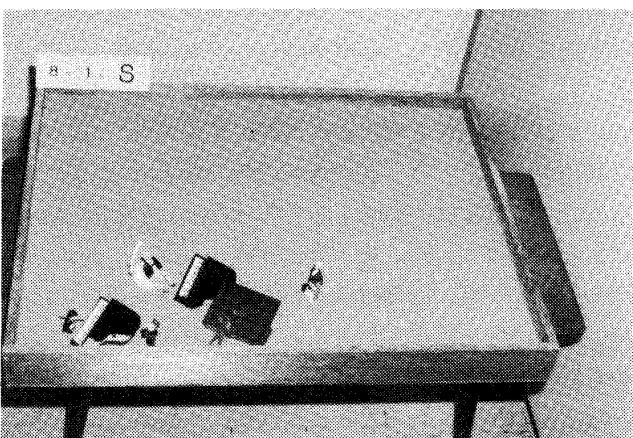


図21 箱庭18

ピアノ2台とステレオ装置1台、それぞれの前に人。さらに、トロンボーンを吹いている人と立っている人を置いた。真ん中の人には「指揮している」と言い、題名は「合奏」と答えた。

〔母親面接〕

夏休み中なので、母にくつづいて教会の集会や合宿に参加している。他県から来た初対面の子とでも話をしている。近所の人とも普通に話すようになった。

(第Ⅳ期のまとめ：箱庭では、それまで動物のみの作品

を延々（12回まで）と作っていたのが嘘のようにがらりと変わり、人間を登場させ、より社会的な場面に転換していった。実生活でも、保育所時代から内気で、家からあまり出なかったS君が自ら友達の家へ行ったり、遅くまで外で遊んで来るようになった。)

第Ⅴ期 終結へ向けて（21~23回）

21回目（8月22日） 箱庭19（図22）

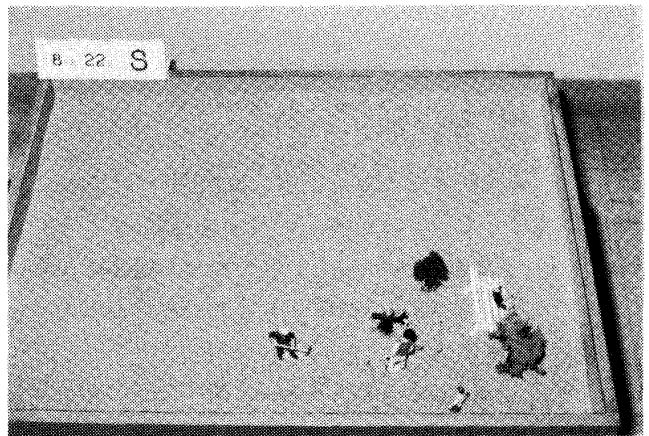


図22 箱庭19

砂の上に指で線を引き、4つに区切る。右下の区画に働いている男性2人、何か持っている男の人とベンチに座っている人、案山子、木2本。「畑を耕しているところ」と。持っている物は「肥料」だと言う。

箱庭作品の変化は前期で述べたように、動物ばかりの世界が続いた後、〈動物の公園〉という場面で初めて人間が2人現れ、〈近所〉で3人になり、〈競馬〉では見物人が19人にもなった。そして〈結婚式〉、〈カーレース〉、〈合奏〉を経て、〈大地を耕し、肥料を施す〉という象徴的な作品が作られたことに治療者は「遂に、ここまで来たか」という感慨を新たにし、S君が来院日を忘れた時に終結を考えた早とちりを反省させられた。

〔母親面接〕

母が持ってきたパンフレットを見て、Sは自ら学習塾へ行き出した。

22回目（9月5日） 箱庭20（図23）

線路を丸く繋いでトンネルをかぶせた。円の内側に駅舎、バス、自動車、パーキング標識、ベンチを置き、そこに男1人女2人を座らせた。駅の構内には左回りの方向で汽車が止まっている。「できた」「なに?」「……」「題、つけられないの?」「うん」と。

前回に治療者が感じたことと、今回の箱庭が線路を繋ぐというやり方ではあるが円型としてまとまり、交通手段としての汽車やバス、駐車場のタクシーなどを考え合



図23 箱庭20

わせて、今度こそ大丈夫だと思ったので、「これからも病院へ来る？もういいと思う？」と尋ねた。「もう、いい」「じゃ、今日で終わりにする？もう1回来てからにする？」「もう1回来てから」ということになった。

[母親面接]

週2回、元気に塾へ通っている。塾の先生との会話は良いらしい。新しい友達もできたようである。

23回目（9月20日） 箱庭21（図24）

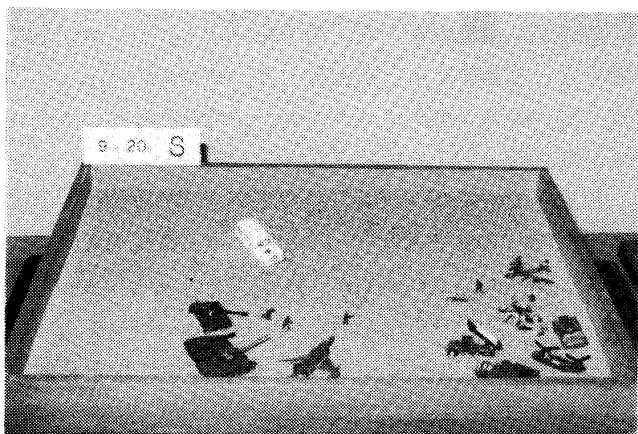


図24 箱庭21

約15分で終了した。「戦争」と言う。今日が最後であることを知っていて作った箱庭である。左右ほぼ同数の兵隊と戦闘機が配置されているが、大砲があるだけ右側が有利に見える。しかし、S君は「どっちが勝つか分からん」と言う。右下に赤十字マークが付いたヘリコプターと左上に救急車を置き、それぞれの部隊へ「救助に来ている」のだと言う。

箱庭での戦いの場面でこの治療を終結することは、治療者として不安がない訳ではない。しかし、これからS君自身がある意味では現実生活で戦っていかねばならないだろうし、その覚悟を示しているものと受け取ることができたのと、救助隊を待機させた心配りに安心し、心

から“もう、大丈夫”と思い、約束どおり、本日を以て終了とした。

終結することについては、母親も賛成しており、「最近、学校ですごく明るくなったと先生に言われた。完全に良くなつたとは言い切れないが、本当に元気になり、積極的になった。学校でもある程度喋っているので、心配はしていません」と語った。

4 考察に代えて

治療経過を初回から終結まですべて記載したのは、S君の特徴および状態の変化をより明確に把握できると考えたからである。彼の緘默は家の外という社会的場面に限られ、5年間余り続いたが、約1年間の通院治療で改善した。薬物をまったく使用せず、本人の箱庭療法と遊戯療法および家族面接（主に母親）を続けることで、内気で引っ込みがちだったS君が活発になり、友達と遅くまで遊んで来るようになった。話す対象・場面とも徐々に広がっていき、学校では新しい担任が緘默に気付かないほどになった。

S君の場合に限らず、子どもの神経症的行動に対する治療は、当然のことながら、子ども自身の成長する強い力とそれを援助する家族（特に母親）の協力があってこそ実を結ぶものである。その際の治療的手技が心理療法である場合は、このことが特に強調される。S君の問題は選択性緘默であり、言語を媒介とする方法は不適当であった。年齢に応じた行動療法が可能であったかもしれないが、目標行動を緘默のみに限定する気はわれわれには初めからなかった。患児は家の外で喋らないだけではなく、元来（緘默の結果としてではなく）、内気で友達もほとんどいなかった。こうした性格的な問題も含めて治療の対象とした。心理療法として箱庭療法を選択したのは、非言語的治療法であることから緘默児にしばしば用いられていること、S君の初回の Baum test では豊かな表現力が見られたこと、箱庭療法にはある程度の枠組があり、治療者にとって変化を把握しやすいことが理由である。もちろん、箱庭にこだわったつもりはなく、進行の途中から患児の希望もあり、遊戯療法に多くの時間を費やした回もあった。しかし、いずれも心理療法として連続するものであり、両者を区別することは困難である。こうした流れの中で、S君は自己を表現し、言葉を発し、自己主張もできるようになっていった。彼は箱庭を媒介とする筆者との“保護された空間”と遊戯療法での安心できる人間関係の中で、自分を確かめ、現実の世界へ飛び立っていったと筆者は考えている。

ところで、選択性緘默に関する研究は、その治療や予

後との関連から分類を試みたものが多いが、必ずしも一致した見解には至っていない。

Hayden,T.L.(1980)は3歳から14歳までの68人の選択性緘默(IQ70~131)を観察した結果、次の4型に分類している。

- ①共生的緘默(Symbiotic Mutism):養育者(主に母親)との強い共生関係。内気で敏感であるが、引きこもりはない。行動は拒絶的。
- ②言語恐怖(Speech Phobic Mutism):自分の声(録音されたものも)を聞くことへの強い恐怖。儀式的な行動(手をぱたぱたするなど)。強迫的。
- ③反応性緘默(Reactive Mutism):一つまたは一連の外傷後に生じる。抑鬱的。引きこもり。固い表情。
- ④受動一攻撃的緘默(Passive-Aggressive Mutism):武器としての沈黙。明らかな敵意をもって話すことを拒否する。過激な反社会的行動。

S君の選択性緘默は、治療経過のところで述べたように、保育所で大便をもらしたこと人前で告げられた事件と密接に関係していると考えられるので、上の分類では“反応性緘默”に該当するであろう。また、別の観点から、大井(1979)のタイプⅡ“社会化意欲薄弱型”;家族以外にコミュニケーションを自ら求めようとする意欲に乏しいが、受け身的には求めるもの——と一致するが、家族病理や患児の無気力さは大井が指摘しているほど重度ではない。すなわち、本症例の場合も家族性に緘默(母が子どもの頃)が見られたものの、普通の家庭であり、“言語刺激の乏しい、コミュニケーションの希薄な家庭”には該当しない。両親は初めは治療に消極的であったが、数回の通院で協力的になり、子どもの変化とともに次第に熱心になっていった。

S君自身は最初の診察場面においてすら、言語的応答ができなくとも意思の交流が十分可能であったし、Baum testや箱庭療法での作品は決して無気力ではなく、豊富なエネルギーが内的世界へ強く向けられていることを示していた。彼が箱庭で見せた変化は治療経過の中で随時記載したのでここで繰り返さないが、内的世界に向かっていたエネルギーが徐々に外的 세계へ向けられていっ

た経緯を示している。

結語として、本症例は選択性緘默の長い期間にもかかわらず、その病態は比較的軽度であったとわれわれは考へている。治療終結から4年を経た現在、彼は中学2年になり、多くの友達もできて元気に過ごしていることを報告して、この小論を終わりたい。

(付記)

稿を終わるにあたり、発表することを快く承諾して下さったS君と御両親に感謝します。

御校閲いただいた金沢大学医学部神経精神医学教室の山口成良教授に深謝いたします。また、母親面接を担当してS君の治療をともに歩んで下さった牧田治郎博士、および適切な助言と協力をいただいた当教室の児童精神医学研究グループの諸先生方にお礼申し上げます。

本報告の要旨は日本箱庭療法学会第1回大会(京都、1987年7月19日)において発表した。その際、 commenter、司会を勤められた樋口和彦同志社大学教授と隈寛二隈病院院長の両先生に、緘默児の箱庭作品および Baum test の見方について御教示いただいたことを併せて深く感謝いたします。

参考文献

- American Psychiatric Association 1980 Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders. (Third Edition), 62-63.
- Hayden,T.L. 1980 Classification of Elective Mutism. Journal of the American Academy of Child Psychiatry, 19, 18-33.
- Kanner,L. 1957 Child Psychiatry (Third Edition) Charles C Thomas, Springfield, Illinois. (黒丸正四郎、牧田清志共訳 1964 「児童精神医学」医学書院, 423-424.)
- 大井正己 1979 児童期の選択性緘默についての一考察 精神神経学雑誌, 81 (6), 365-389.
- Tramer,M. 1934 Elektiver Mutismus bei Kindern. Zeitschrift für Kinderpsychiatrie, 1, 30-35.